

サツジャナ著『究竟論提要』

—著者および梵文写本について—

加 納 和 雄

1 はじめに

およそ5世紀ころに成立した『宝性論』は、如来蔵思想を体系的に叙述するインド撰述論書として注目を集め、その梵文原典を中心として、多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、その注釈書に関する研究はいまだ十分になされているとはいえない。本稿では、数少ないインド撰述の『宝性論』の注釈書であるサツジャナ(Sajjana)の『究竟論提要』(*Mahāyānottaratantraśāstropadeśa*)を取り上げ、若干の考察を加えてみたい⁽¹⁾。この文献は『宝性論』の内容を独自の観点から要約した「達意釈」であるが、インドにおいて『宝性論』がいかんにして理解されていたかを知る上で貴重な資料である。

サツジャナは11世紀後半に活躍したカシュミールの学僧で、チベット人の弟子ゴク・ロデンシェーラプ(rNgog Blo ldan shes rab, 1059-1109)と共に『宝性論』のチベット語訳を行った。

『究竟論提要』には、シャーラダー文字で綴られた梵文具葉写本のみが伝わっており、チベット訳の存在は確認されていない。高崎直道氏は、その梵文写本にもとづいてローマ字転写を行い、内容の概観を提示した。本稿は、『究竟論提要』の著者サツジャナについてその人物像を紹介し、次に梵文写本について検討して、最後に高崎1974に提示されたテキストへの訂正案を提示するものであり、それによって、高崎氏の成果に、若干の補足を試みる。なお、校訂テキストと和訳、および写本に見られる割注の解説の結果は、別稿に提示する予定である。

2 サツジャナの人物像

(1) 活躍年代

『究竟論提要』を著したサツジャナの「伝記」は、現在のところその存在が知ら

れていない。チベット撰述の資料に散見される情報によれば、サツジャナはカシュミールのニルパマプラで活躍したことが知られ、しばしば「婆羅門」(bram ze)の称号で呼ばれている。また彼は、ラトナヴァジュラ⁽²⁾の孫であり、マハージャナ⁽³⁾の父にあたとされる。

サツジャナとその息子に関しての記述はチベットの伝承に多少の混乱がみられ、息子の名をスガタとする説や、父子関係を逆転して説く記述もある⁽⁴⁾。しかしサツジャナは、自著『息子への手紙』(Putralekha) 第4章18偈⁽⁵⁾において、呼格で「マハージャナよ、汝は」と明言しているため、息子の名は「マハージャナ」であると確定できる。またサツジャナを父とし、マハージャナをその息子とする説は、ツォンカパおよびロントゥンの記述によっても裏付けられる⁽⁶⁾。

『宝性論』をチベットへ伝承するに際して大きく貢献したサツジャナは、たとえばショヌペルの『宝性論』注の中で以下のように記されている。

『法法性分別論』と『宝性論』については或る仏塔のくぼみから光が発しているのを王マイトリパー(ca. 1007-1085)⁽⁷⁾が御覧になり、光が発している場所から「何かある」と考え、探すと両論書の写本があらわれた。喜々として尊者〔弥勒〕を勧請すると雲の隙間から現前にあらわれ、伝授したといわれる。

それから学者アーナンダキールティというものが〔両論書を〕王〔マイトリパー〕から学んだのち、乞食の姿でカシュミールにやってきた。

そのとき〔アーナンダキールティをみた〕学者サツジャナは「賢者だ」と見抜いて、自宅にお招きして両論書を学ばれて書写もした⁽⁸⁾。

彼(サツジャナ)のもとで大翻訳師ロデンシェーラプ(1059-1109)は〔『宝性論』を〕学ばれて、カシュミールのアヌパマプラという街で翻訳し、チベットで詳しく解説なされた。

ダパ・ゴンシェ(Gra pa mNgon shes, d.1090)⁽⁹⁾の弟子ツェンカウォチェ(b.1021)という方も大翻訳師〔ロデンシェーラプ〕と共にカシュミールにやってきて、サツジャナに「私は、弥勒世尊の教えを生涯最期の教えとしたいので、〔それを〕教誡と共に、〔我が〕心に刻みつけてください⁽¹⁰⁾」とお願いした。そして翻訳師ス・ガワドルジェが通訳して〔弥勒〕五部書を全て教示され、『宝性論』の教誡も完全に授けた。そしてツェンはチベットに戻りウー・ツァン地方で多くの人に解説なされた。

翻訳師ス・ガワドルジェは『宝性論』に、サツジャナの教えと一致した注釈

を著述なさり、『法法性分別論』の偈本と注釈も翻訳した⁽¹¹⁾。

この記述によれば、サツジャナはアーナンダキールティから『宝性論』の教えを授かり、それをロデンシェーラブ、ツェンカウォチェ、ス・ガワドルジェの3人のチベット人に伝授したことがわかる⁽¹²⁾。このうちロデンシェーラブに関しては、1076年に西チベットを発ちカシュミールに向かい、その後カシュミールとマガダ地方において都合17年間滞在し、1091年に再びチベットに戻ったことが知られている⁽¹³⁾。よってサツジャナは、11世紀後半に活躍したと推定される。

なお、シヨンヌペルが示すこの『宝性論』の伝承系譜「... Maitri pa → Ānandakīrti → Sajjana → rNgog ...」は、多くの「聴聞録」(gsan yig) の示す系譜と一致する⁽¹⁴⁾。ゴルチェンとササンマティは「... Ratnavajra → Sajjana → Parahita → rNgog ...」⁽¹⁵⁾、ロントゥンは「Anarakṣita → Sajjana → Mahājana」という系譜を示し⁽¹⁶⁾、シヨンヌペルの示す系譜と多少相違するが、いずれもサツジャナを含んでいる点では共通している⁽¹⁷⁾。

(2) 著作

サツジャナの著作は現在まで、本稿で取り上げる『究竟論提要』と、上述の『息子への手紙』(Putralekha) の2点が知られている⁽¹⁸⁾。

チベット語訳のみが残る『息子への手紙』は、サツジャナから息子のマハージャナに宛てられた手紙であり、手紙を受け取ったマハージャナ本人がチベット語訳に携わった⁽¹⁹⁾。この文献についてはDietzによる概観とチベット文校訂、および独訳があり、Hahnがその概観を英訳している。さらにHanischは同書第4章の20偈中、14偈がアールヤシューラ作『ジャータカマーラー』にもとづいている点を指摘し、該当箇所の独訳を提示している⁽²⁰⁾。

『息子への手紙』は偈文で綴られ、都合53詩節からなり、序、第1章「愛欲の克服」、第2章「所有欲の克服」、第3章「性欲の克服」、第4章「飲酒欲の克服」、回向偈という6部構成である。手紙の目的などは、以下の冒頭詩節によって知ることができる。

大海におけるこの大地は千万阿羅漢の国であり、善行者によって満たされている、無比なる吉祥への門であるこの智慧ある場所において、学者ラトナヴァジュラの伝統を保持し、婆羅門の家系のものにして、容姿、能力、知性が完備され

たものこそ「偉大なる人」(Mahājana) となるであろう。(序 第1偈)

〔しかし息子は〕きわめて慈しみ深い父母と友人と親類を、まるで唾を吐き捨てるかのように省みずにうちすてて、薄暗い蛮人の辺境地に一人さまよう。かの聡明なる息子の、智慧の灯明が〔闇のような辺境地を〕照らし出しますように。(序 第2偈)

慈悲深き先達である私が善説という大海の島から得たこの宝の手紙を息子に宛てる。注意深くそして喜々として信心をもって聞きなさい。(序 第3偈)

息子よ。安穩なるマドヤデーシャの宮殿での楽しみをすて、不動なる心によって絶え間なく慈しむ、父母、友人、親類をすてて、おまえが辺境の地をさまよい歩くことは実に不届きなことである。(第1章 第1偈)

正法のために父母をすててスダナ⁽²¹⁾のように異国を巡行するのは妥当なことだが、愛欲のために父母をすてて、卑賤な地をさまよい歩くことにいかなる理があるろうか。(第1章第2偈)⁽²²⁾

序の第1偈にはサツジャナおよび息子マハージャナがラトナヴァジュラの家系に属することが述べられ、続いて辺境地にいる息子への懸念が示される。ここでいわれる「辺境地」あるいは「卑賤な地」がチベットを指すことは間違いない。マハージャナには西チベット・ガリ地方に滞在し、翻訳に携わった事実があり⁽²³⁾、手紙はその時期に差し出されたものと考えられる。この手紙は仏教徒としての行動規範を説く金言で満ちており、様々な仏教説話が織り込まれている⁽²⁴⁾。

(3) 思想

以下では、チベット資料に見られる断片的な記述から、サツジャナの思想的立場についてまとめておきたい。

まずプトウンの『仏教史』には、サツジャナについて以下のように述べられている。

サツジャナは「独覚の種姓をもつものには独覚の法輪が転じられた」と仰った。チャク〔翻訳師〕は「〔その説明は〕法輪を三種として解説することと矛盾する。そのような〔独覚を対象とした〕特別な蔵は見当たらないので〔サツジャナの見解は〕退けられる」という⁽²⁵⁾。

詳細は不明であるが、この引用より、サツジャナは三転法輪を三乗と対応させていた、と理解できる。それに対してチャク翻訳師（1197-1263/64）はその説は根拠がないと斥けている。

いっぽう、ジョナン派の学僧クンガドルチョク（1507-1566）は、サツジャナの三転法輪説に関して以下のような異説を紹介する。

他空の教えについてツェンカウォチェは次のように伝える。「カシュミールの学者サツジャナの教えによると、勝者は、第一法輪には四諦、中間には無自性、最後にはよく分析された法の輪を、繰り返し都合3度にわたって転ぜられた。そのうち前2者（第一および第二法輪）は実と仮を区別しないが、後者（第三法輪）は勝義を確定する際に、中道と極端を区別し、現象と法性を区別して教示した⁽²⁶⁾。」

この説はツェンカウォチェの自著『蓮華鉤』（*Pad ma lcags kyu*）に出るといふ⁽²⁷⁾。プトゥンが紹介する説と一致しないが、ここでサツジャナは第三法輪を最終的な立場として認めているようにみえる。

ジャムヤンガロ（1429-1503）は、『大乘莊嚴經論』I.2 に対するサツジャナ流の注釈を紹介する⁽²⁸⁾。同偈は5種の比喻（黄金、蓮華、美食、美文、宝）を説き⁽²⁹⁾、世親注はそれに対応する5種の内容（*sādhya*、*vyutpādyā*、*cintya*、*acintya*、*pariniṣpanna*）を説く⁽³⁰⁾。後代の注釈者たちはそれらを『大乘莊嚴經論』全体のシノプシスとみなしている。以下のサツジャナ流の注釈もそのひとつである。

またサツジャナ流のあるものは、大乘成立（1章）が「所成」（*sādhya*）、帰依から菩提（2-9章）までが「分析対象」（*vyutpādyā*）、信解から業判（10-11章）までが「思惟対象」（*cintya*）、六波羅蜜から行⁽³¹⁾（12-20/21章）までが「不可思議なるもの」（*acintya*）、最終章⁽³²⁾の内容が「円成実」（*pariniṣpanna*）〔にそれぞれ対応する〕と理解されるので、『大乘莊嚴經論』の所説は）順に5種の比喻と関連するといふ⁽³³⁾。

さらにジャムヤンガロは『大乘莊嚴經論』I.2に対する諸学者の見解をまとめている⁽³⁴⁾。サツジャナの立場を基軸に、それらをまとめて示すと以下のようなになる。

	黄金喩	蓮華喩	美食喩	美文喩	宝喩
Vasubandhu	所成	分析対象	思惟対象	不可思議	完全なる悟り
Asvabhāva/ Sthiramati ⁽³⁵⁾	名	相	分別	真如	無分別智
	遍計	依他起	依他起への遍計	円成実	
	大乘を 誤解する者	大乘を信じる が理解しない者	大乘に悟入する者		
rNgog ⁽³⁶⁾	本性の優 れた種姓	出世間発心	清浄行	不住証得	円満獲得
	2-5章	6章	7-8章	9章前半	9章後半 ⁽³⁷⁾
Jñānaśri ⁽³⁸⁾	1-3章/ 10-13章	4-5章/ 14-15章	6-7章/ 16-18章	8章/ 19章	9章/ 最終章
Śāntibhadra ⁽³⁹⁾	名	相	分別	真如	無分別智
	客体	主体		客体	主体
	所断			対治	
Sajjana	1章	2-9章	10-11章	12-21章	最終章

このように5種の喩の解釈は、各々の立場においてことごとく異なっている。アスヴァバーヴァとスティラマティとシャーンティバドラは5種の喩を「五事」(pañcavastu: 名、相、分別、真如、無分別智)にそれぞれあてはめて解釈する⁽⁴⁰⁾。いっぽうカシュミールのジュニャーナシュリーとゴク・ロデンシェーラブは、その立場を批判して⁽⁴¹⁾それぞれ別々に自らの解釈を打ち立てる。なおサτζャナとロデンシェーラブは師弟関係であったにもかかわらず、両者の解釈が相違しているのは興味深い。

3 『究竟論提要』梵文写本について

(1) 写本の由来

『究竟論提要』の梵文写本は、わずか一葉の表裏両面からなる完本である。

ラーフラ・サーンクリッティヤーヤナは1934年にシャル寺の奥の院リブクにおいてこの写本を発見し、「Mahāyānottaratantra、(Maitreyaṅātha作)、シャーラダー文字、20 $\frac{2}{3}$ × 2 $\frac{1}{3}$ インチ」⁽⁴²⁾と報告している。彼は写本を『宝性論』そのものと誤解していた可能性がある。サーンクリッティヤーヤナは、次の調査、すなわ

ち1936年8月5日から15日にかけて同写本を写真撮影した⁽⁴³⁾。いわゆる「『宝性論』B写本」と同じコマに収めて2度撮影しているが、いずれの写真も不鮮明で、使用には耐えない⁽⁴⁴⁾。また同じコマには、『究竟論提要』の写本と同じ筆跡で記された、別の2枚の貝葉写本も収められているが、高崎氏も指摘するように、写真が不鮮明なため判読できず、未比定のままである⁽⁴⁵⁾。

『究竟論提要』の存在を初めて報告したのはJohnstonである。彼は1941年に執筆した『宝性論』の梵文校訂本の序文において以下のように指摘している。

上記の3種の写本のうち1点は検討の結果、『宝性論』ではないことがわかった。現在の〔写本の〕構成では、それは同一の文字で記された3フォリオからなる。その文字は実質的に他の2種の写本（MS A/B）よりも古く、おそらく8世紀もしくはそれ以前のものかもしれない。写真版の判読は困難であるが、奥書に“mahāyānottaratantropadeśaḥ kṛtiḥ śrisatyajñānapādānām”とあるように『宝性論』の手短な要約を含んでいる。著者“Satyajñāna”はみたところ、他所のどこにも言及されておらず、本作（『宝性論』）のテキストに光を投じるようなくだりに私は全く気づかなかった⁽⁴⁶⁾。

Johnstonは奥書にある著者名を「Satyajñāna」と読むが、これは誤りで、写本にはSajjanaとある。Johnstonはこの序文を執筆した翌年1942年に死去し、同写本の解読は果たされなかった。

サーンクリットヤーヤナの後にチベットを訪れたTucciもやはり同じ貝葉写本を撮影している⁽⁴⁷⁾。サーンクリットヤーヤナの不鮮明な写真に比べると、こちらはきわめて鮮明である。Tucciはその写真をGokhaleに委託し⁽⁴⁸⁾、Gokhaleのもとで高崎氏がその解読を試み、ローマ字転写を発表した（高崎1974）⁽⁴⁹⁾。

なお、シャル寺の奥の院リブクに所蔵されていたすべての梵文写本は、文化大革命の前に北京に移され、その後、その多くがチベットに返還されたといわれるが⁽⁵⁰⁾、当貝葉写本（原本）のゆくえはいまのところ不明である。

（2）文字の特徴と書写年代

『究竟論提要』の梵文写本の大きさは20% \times 2 $\frac{1}{3}$ インチ⁽⁵¹⁾、素材は貝葉で、2つの紐穴をもち、シャーラダー文字で綴られている。シャーラダー文字はおもにカシュミール地方で使用された。サツジャナの活躍した場がカシュミールであった点をあ

わせて考慮すると、当写本がそこで筆写されたと考えて問題はない。いっぽうで、上記のようにJohnstonはこの写本が8世紀以前に筆写された可能性を指摘するが⁽⁵²⁾、Slajeの定義⁽⁵³⁾にしたがえばそれは否定されるべきであり、Deambiもシャーラー文字が写本に使用された例は12世紀以前においては知られていないという⁽⁵⁴⁾。

高崎氏は、同写本にみられる表記上の特色について、次の5点を挙げる。

- (i) 子音に附帯する母音記号 o および e は 2 種の書体が併用される。
- (ii) 子音脱落 (例 *sattva* > *satva*) はみられるが、*repha* 直後の子音重複 (例 *rma* > *rmma*) はみられない。
- (iii) 詩節末尾の *anusvāra* はほとんどみられない。
- (iv) *visarga* にかえて、無声喉音 (k/kh) 直前では *jihvāmūliya* が使用され、無声唇音 (p/ph) 直前では *upadhmaniya* が使用される⁽⁵⁵⁾。

- (v) *ma*, *śa*, *sa* の 3 文字が類似している。*rtha* は 3 種の書体が混在する⁽⁵⁶⁾。

このうち (i) と (v) は写本の筆写年代を限定する手がかりとなりうる。(i) に関して、特に附帯母音 e は、シャーラー文字の古い段階においては、*pr̥ṣṭhamātrā* (文字の左肩に短い垂線を附して母音を示す) と *śiromātrā* (文字の上部に斜線を附して母音を示す) という 2 種の表記方法が併用される⁽⁵⁷⁾。この両者の併用は、シャーラー文字の祖形とされるギルギット/バーミヤンII型文字 (6-10世紀) において既にみられる⁽⁵⁸⁾。シャーラー文字における *pr̥ṣṭhamātrā* の使用は15世紀になって廃れたといわれる⁽⁵⁹⁾。以下に示すように、当写本には 2 種の表記方法が混在しているため、古い段階にあるといえる。



bo (*pr̥ṣṭhamātrā*) **bo** (*śiromātrā*) **rde** (*pr̥ṣṭhamātrā*) **rde** (*śiromātrā*)

(v) の *rtha* の表記に関していうと、同写本に混在する 2 種の書体のうち、1 つ (下記左側) は古い段階のものであり、ギルギット/バーミヤンII型文字の字形と共通する⁽⁶⁰⁾。



rtha

rtha

以上から、写本筆写年代の上限は、著者サツジャナの生存年である11世紀後半、そして下限は、書体から判断しておよそ15世紀ころと推定される。

その他、表記上もしくは音韻上の特徴として、rとriの交替が3例⁽⁶¹⁾、ṇとnの交替が1例⁽⁶²⁾みられるほか、ときおり欄外注記において不規則な連声がみられる⁽⁶³⁾。

(3) 筆写の体裁と韻律

写本の記述内容は、37の詩節からなる本文と、行間を埋め尽くして記された割注とからなる。そのうち本文は表面が5行、裏面が4行からなる。注記は第1-8、10-17、19-26、28-29、31、33偈にそれぞれ付されている⁽⁶⁴⁾。なかでも第28偈に対する注記は、同偈の上部行間に記されるほかに、少し離れた写本末尾部分（貝葉裏面右下）にも3行にわたって記されている。本文にはしばしば黒点が付されるが、これは注記の位置を指示するためのものとみられる。注記の内容は、『宝性論』の偈頌との対応関係を指示するが多いが⁽⁶⁵⁾、ときにはサツジャナが使用する特別な概念を説明する場合もある⁽⁶⁶⁾。

写本の保存状態は良好である。ただし左側欄外部分の一部欠損しているために注記が2文字程度失われており、右側欄外部分の文字がかすれて一部判読不能である。また、しばしば本文と注記には書き直しの跡がみられ、判読が困難な場合がある。

本文に用いられる韻律は37詩節中35詩節がślokaであり、第12、13偈の2詩節がāryāの下位分類gitiにあたる。顕著なのはślokaにおけるvipulāの使用率である。実に37詩節中15詩節がvipulāを含んでいる。

4 高崎1974への訂正リスト

以下に、高崎1974に提示された『究竟論提要』のローマ字化テキストに対する補完および訂正を示す。

基本的に写本の読みに基づいて訂正を行ったが、上述のごとく写本には筆者自身による書き直しなどがしばしばみられ、判読が困難な箇所が少なくない。さらに内容が難解なために文脈からは読みが確定しにくい箇所もある。そのため、判断を保留した箇所が数点残っている。また17bへの訂正には疑問符を付して、未確定であることを示した。なお高崎氏が括弧内に補った訂正案（emendation）については、煩雑さを避けるために割愛した。異読についてのより詳細な記述は、目下作成中の校訂テキストにおいて示すこととしたい。

写本の読解に際してはHarunaga Isaacson教授およびDiwakar Acharya博士のご助力を頂いた。

使用記号

.	1 akṣaraに属する未解読の要素
..	未解読の1 akṣara
om.	省略すべき語
em.	emendation
conj.	conjecture

	高崎1974	訂正
1a	.. bhinna°	oṃ bhinna°
1c	°phalespūrvyā	°phalepsur vā
3a	'śuddha°	'śuddhi° (em.)
3c	sarvaṇyasyāpi	śarāṇyasyāpi
4a	°saṃbhāro	°saṃbhāre
4d	pāraṃparyā°	pāraṃparya°
5b	°suvṛttis	°pravṛttis
6a	karma ... upāyena	dharmaiś ced yady upāyena (conj.)
7b	pratyaṃyam esriṣuḥ	pratyaṃyam āsritaḥ (em.)
7d	°bhāvana .o .i .et	°bhāvanāyor višet
8b	satvārthamṛjivāśrayāt	satvārthasya jināśrayāt
9a	.. garbho	vā garbho
9b	tadg. .. mātratā	tadgotrasambhavāt
9cd	dvidhāntarāyāṃ .. apu	dvidhāntarāyaṃ bījañ jinagotrakam (9cdは割注とみなして偈から外す)
9ef	tathatā .i ..	tathatā kliṣṭa° (conj.)
10a	vigoṭraṃ	viśvatra (em.)
10b	nānavataṃ	nānavat
10c	ssantu	(外す)
10d	samudānita	samudānitam (em.)
11c	mārga°	cāpi

13c	akramapathā	akramam atha
14cd	pāramparyetanaddhābhyā	pāramparyetaratvābhyāṃ (em.)
16b	°gocaram	°gocarām
16d	paripādanā	paripācanā
17b	pariyujyate	pathi yujyate (?)
19b	tūtrayyāmādiḥ kārataḥ	bhūtrayyām avikārataḥ
19c	phalānmukhyam	phalaunmukhyam
20b	bhāvanānuvātmikā	bhāvanā syān navātmikā
21cd	°ārtha .. mā kāṅkṣaya°	°āarthakleśā ekaikāḥ kṣaya°
22ab	anupameti dṛṣṭānte .. yaḥ	atra padmādidṛṣṭāntair layaḥ
22c	nirvedhaka°	nirvedaka°
22d	°audhatya°	°auddhatya°
23d	kuśalo	kuśale
25a	.e .. yi sūdito vyaktuṃ	gotrādisūcito vyaktuṃ
25b	cintādikāt	cintādikāḥ (em.)
25cd	°vyavadhināpi sve'rtham	°vyavadhinā piṇḍārtham
26a	tātre	tatra
26cd	vyaktibhāryatvasyānuvaktikā	vyaktir bhāvyatvasyānuvarttikā
27c	prāpya	prāpyaṃ
28cd	āptabādho dvārās ca	āptabādhoddhārās ca
29a	amalādāv	acalādāv
30ab	bodhyādisstu cāsuddhadvābhūmigāḥ	bodhyādis sa ca saṃbuddhabhūmigāḥ
30c	mahā°	tatra
30d	āropāpāhato	āropāpohato
32c	prāptyā tenāśrayatva°	prāptyāśrayatva°
32d	°ācintyatveṣu dayohanam	°ācintyatvais tadapohanam
33cd	jñānabhāve	jñāne rūpe
34cd	podādanavadhāma°	ṣoḍhā ca navadhā ca
35b	avaśamsayā	anuśamsayā
36c	°jñās ca	°jñās ca

参考文献

略号

- D チベット大蔵経デルゲ版
 MAVT Sthiramati, *Madhyāntavibhāgaṭikā*. Ed. S. Yamaguchi. Nagoya, 1934.
 MSA *Mahāyānasūtrālamkāra*. Ed. S. Lévi. Paris, 1907.
 P チベット大蔵経北京版

チベット語資料

- Klong rdol thob yig* Klong rdol Ngag dbang blo bzang. *Thob yig thar pa'i them skas las mdo sngags kyi khrid kyi skor sogs kyi tho dang brgyud yig skor brgyad. Klong rdol ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum*. Vol. 2. pp. 1-281. Gangs can rig brjod 21. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1991.
- bKa' gdams bang mdzod* Ed. Ye shes don grub bstan pa'i rgyal mtshan. *Legs par bshad pa bka' gdams rin po che'i gsung gi gces btus nor bu'i bang mdzod*. Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1996.
- Khrid brgya'i skor* Kun dga' grol mchog. Dehradun: Sa skya Centre, 1984.
- mKhas grub gsan yig* mKhas grub rje dge legs dpal bzang. *mKhas grub thams cad mkhyen pa dge legs dpal bzang po'i gsan yig*. Collected Works. Zhol ed. Vol. ka. Dharamsala, 1981.
- mKhas pa'i dga' ston* dPa' bo gTsong lag phreng ba. *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. 2 Vols. Varanasi: Vajra Vidya Institute, 2003.
- rGya gar chos 'byung* Tāranātha. Ed. A. Schiefner. *Doctrinae Buddhice in India Propagatione*. St. Petersburg, 1868.
- rGyud bla dka' 'grel* bSod nams grags pa, Paṇ chen. *Theg pa chen po rgyud bla ma'i bstan bcos 'grel pa dang bcas pa'i dka' 'grel gnod kyi zla 'od*. Collected Works. Vol. 5. Mundgod, 1986.
- rGyud bla 'grel pa* Kong sprul Blo gros mtha' yas. *Theg pa chen po rgyud bla ma'i bstan bcos snying po'i don mngon sum lam gyi bshad srol dang sbyar ba'i rnam par 'grel pa phyr mi ldog pa seng ge'i nga ro*. Rumtek Monastery.
- rGyud bla 'grel bshad* 'Gos Lo tsā ba gZhon nu dpal. *Theg pa chen po rgyud bla ma'i bstan bcos kyi 'grel bshad de kho na nyid rab tu gsal ba'i me long*. Ed. K.-D. Mathes. *'Gos Lo tsā ba gZhon nu dpal's Commentary on the Ratnagotravibhāgavyākhyā*. Nepal Research Centre Publications 24. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2003.

- rGyud bla rnam bshad* Sa bzang Mati paṅ chen 'Jam dbyangs blo gros rgyal mtshan. *Theg pa chen po'i rgyud bla ma'i bstan bcos kyi rnam par bshad pa nges don rab gsal snang ba*. The Collection Works of the Ancient Sa Skya pa Scholars. Vol. 4, 1-520. Delhi, 1999.
- Ngag dbang thob yig* Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho, Dalailama Vth. *Zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos kyi thob yig gang ga'i chu rgyun*. The Collected Works. Vol. 1, 1-838. Sikkhim, 1991.
- Ngor chen thob yig* Ngor chen Kun dga' bzang po. *Thob yig rgya mtsho*. Sa skya pa'i bka' 'bum. Vol. 9, pp. 44-108. Tokyo: Tōyōbunko, 1968-1969.
- Chos nyid rnam bshad* Rong ston Shākya rgyal mtshan. *Chos dang chos nyid rnam par 'byed pa'i rnam bshad legs par 'doms pa lha'i rnga bo che*. *Commentaries on Asaṅga's Madhyāntavibhaṅga and Dharmadharmatāvibhaṅga*. Delhi: T.G. Dhongthog, 1979.
- rJe gsan yig* Tsong kha pa Blo bzang grags pa. *rJe rin po che blo bzang grags pa'i dpal gyi gsan yig*. Collected Works. Zhol ed. Vol. ka, fols. 1a-27b.
- Deb ther sngon po* 'Gos Lo tsā ba gZhon nu dpal. *Deb ther sngon po*. 2 Vols. Varanasi: Vajra Vidya Institute, 2003.
- mDo rgyan mchod sprin* 'Jam dbyangs dga' ba'i blo gros. *Theg pa chen po mdo sde'i rgyan gyi gzhung 'brel kun bzang mchod sprin*. Baksa Duar, 1965.
- Bu ston chos 'byung* Bu ston Rin chen grub. *bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*. Collected Works. Vol. 24 (ya), 633-1057. New Delhi, 1971.
- Bu ston gsan yig* Bu ston Rin chen grub. *Bla ma dam pa rnams kyis rjes su bzung ba'i tshul bka' drin rjes su dran par byed pa*. Collected Works. Vol. 26 (la), 1-142. New Delhi, 1971.
- 'Bras spungs dkar chags* Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. *'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*. Mi rigs dpe skrung khang, 2005.
- g.Ya' sel* sDe srid Sangs rgyas rgya mtsho. *bsTan bcos bai dū rya dkar po las dris lan 'khrul snang g.ya' sel don gyi bzhin ras ston byed*. New Delhi: T. Tsepal Taikhang, 1971.
- Rol pa'i chu gter* Tshul khriṃs rin chen, sDe dge Zhu chen. *dPal ldan bla ma dam pa rnams las dam pa'i chos thos pa'i yi ge don gnyer gdengs can rol pa'i chu gter*. *Record of Teachings Received*. 2 Vols. Dehradun, 1970.

Rwa lo rnam thar Rwa Ye shes seng ge. *mThu stobs dbang phyug rje btsun rwa lo tsā ba'i rnam par thar pa kun khyab snyan pa'i rnga sgra*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1989.

二次資料

- 小谷信千代 1984 『大乘莊嚴經論の研究』文栄堂書店。
- 川越英真 1985 「Mar pa Chos kyi dbaṅ phyugと彼のLo chuñについて」『印度学佛教学研究』33-2: 129-133。
- 資延恭敏 1974 「Sūtrālamkāra-Piṇḍārtha (莊嚴經論總義) の和訳と研究」『密教文化』107: 71-83。
- 高崎直道 1975 「宝性論の註釈Mahāyānottaratantraśāstropadeśaの写本」『印度学佛教学研究』23-2: 52-59。
- 武内紹晃ほか編著 1995 『梵文大乘莊嚴經論写本』(龍谷大学善本叢書14)、法藏館。
- 塚本啓祥ほか編著 1990 『梵語仏典の研究III 論書篇』平楽寺書店。
- 中村瑞隆 1985 「Mahāyānottaratantraśāstraṭippanī by Vairocanarakṣita」『平川彰古希記念論集 仏教思想の諸問題』春秋社: 1-16。
- 野澤静證 1936 「利他賢造『莊嚴經論初二偈解説』に就て」『宗教研究』新13-2: 60-81。
- 1938 「智吉祥造『莊嚴經論總義』に就て」『仏教研究』2-2: 104-154。
- 袴谷憲昭 2001 『唯識思想論考』大蔵出版。
- Bandurski, F. 1994. Übersicht über die Göttingener Sammlungen der von Rāhula Sāṅkrīyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, III). In: *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur. Sanskrit Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Beiheft 5. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. pp. 9-126.
- Deambi, B.K.K. 1982. *Corpus of Śāradā inscriptions of Kashmir with special reference to origin and development of Śāradā-script*. Delhi: A. K. Prakashan.
- Dietz, S. 1984. *Die buddhistische Brieffliteratur Indiens*. Asiatische Forschungen Band 84. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Hahn, M. 1999. *Invitation to Enlightenment: Letter to the Great King Kanīṣka by Mātrcēṭa, Letter to a Disciple by Candragomin*. Berkeley: Darma Publishing.
- Hanisch, A. 2002. Lob des Alkohls: Eine ironische Preisrede aus Āryaśūras *Kumbhājātaka* als Vorlage für das 4. Kapitel von Sajjanas *Putralekha*. *Śikhisamuccayaḥ: Indian and Tibetan Studies*. Ed. D. Dimitrov, U. Roesler, and R. Steiner. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 53. Wien. pp. 79-108.
- Jackson, D. 1987. *The Entrance Gate for the Wise (Section III) : Sa-skye Paṇḍita on Indian and Tibetan Traditions of Pramāṇa and Philosophical Debate*. 2 vols. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 17. Wien.
- Johnston, E.H. 1950. *Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantraśāstra*. Patna: The Bihar Research Society.
- Kawamura, L. 1984. *The Dharmadharmatāvibhāga*. 『印度学仏教学研究』33-2. pp. 10-17.

- Kramer, R. 1997. rNgog Blo-ldan-shes-rab (1059-1109) : The Life and Works of the Great Translator. M.A. Thesis. University Hamburg.
- Mathes, K. D. 1996. *Unterscheidung der Gegebenheiten von ihrem Wahren Wesen (Dharmadharmatāvibhāga)*. Indica et Tibetica 26. Swisttal-Odendorf.
- Naudou, J. 1968. *Les Bouddhistes Kaśmīriens au Moyen Age*. Paris: Bibliothèque d'Études.
- Obermiller, E. 1932. *History of Buddhism (Chos-'byung) by Bu-ston. II. Part: The History of Buddhism in India and Tibet*. (Materialien zur Kunde des Buddhismus; 19), Heidelberg: O. Harrassowitz.
- Roerich, G. 1949. *The Blue Annals*. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.
- Sander, L. 1968. *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. VOHD, Suppl. 8. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- Sānkrtyāyana, R. 1935. Sanskrit Palm-Leaf Mss. in Tibet. JBORS 21-1. pp. 21-43.
- Seyfort Ruegg, D. 1969. *La Théorie du Tathāgatagarbha et du Gotra. Études sur Sotériologie et la Gnoséologie du Bouddhisme*. École Française d'Extrême-Orient L XX. Paris.
- 2000. *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy: Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought Part 1*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 50. Wien.
- Sferra, F. 2000. Sanskrit Manuscripts and Photos of Sanskrit Manuscripts in Giuseppe Tucci's Collection. A Preliminary Report. In: P. Balcerowicz and M. Mejer (ed.), *On the Understanding of Other Cultures. Proceedings of the International Conference on Sanskrit and Related Studies to Commemorate the Centenary of the Birth of Stanislaw Schayer*. Studia Indologiczne 7. pp. 397-447.
- Slaje, W. 1993. *Indische Schriften, Band 1, Śāradā, Deskriptiv-synchrone Schriftkunde zur Bearbeitung kaschmirischer Sanskrit-Manuscripte, Auf der Grundlage von Kuśālas Ghaṭakharpara-Gūḍhadipikā und unter graphischer Mitwirkung von Eva Slaje*. Reinbek.
- Steinkellner, E. 2004. *A Tale of Leaves: On Sanskrit Manuscripts in Tibet, Their Past and their Future*. Amsterdam: Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen.
- Stearns, C. 1999. *The Buddha from Dolpo: A Study of the Life and Thought of the Tibetan Master Dolpopa Sherab Gyaltzen*. New York: State University of New York Press.
- Tatz, M. 1987. The Life of the Siddha-philosopher Maitrigupta. *Journal of the American Oriental Society* 107.4. pp. 695-711.
- Tucci, G. 1956-1958. *Minor Buddhist Texts*, part 1-2. Rome: IsMEO.
- Vitali, R. 1990. *Early Temples of Central Tibet*. London: Serindia.

『究竟論提要』梵文写本の写真版は高崎直道教授にご提供いただきました。また草稿の検討に際

して川崎一洋氏および苦米地等流氏のご助力を頂きました。記して謝意を表します。

註

- (1) 現在知られているインド撰述の『宝性論』注釈書としては、その他、ヴァイローチャナラクシタ著 *Mahāyānottaratantraṭippaṇī* が挙げられる。これには梵文写本が現存しており、中村瑞隆はテキストの七割程度をトランスクリプトして発表した(中村1985)。本稿筆写は未発表部分を含むテキスト全体の批判的校訂本を目下準備している。下記注(40)参照。
- (2) ラトナヴァジュラはヴィクラマシーラ僧院の六賢門のひとりで、11世紀前半の人物である。ターラナータによると彼は在家仏教徒であり、30歳までカシュミールで学んだ後、マガダに来て学び、さらにブッダガヤで修行をしてからヴィクラマシーラに至ったという。ここでは密教と論理学と弥勒五法などを主に説き、その後、再びカシュミールに戻って、晩年はウディヤーナですごしたという(*rGya gar chos 'byung*, pp. 182.10-183.11)。なおデブン寺所蔵のチベット文献目録にはラトナヴァジュラ作の『宝性論』注の名が挙げられている(*'Bras spungs dkar chag*, p. 1403)。
- (3) マハージャナの作品には *Prajñāpāramitāhṛdayārthaparijñāna* (D.3822, P.5223) があり、センゲゲンツェン (*Seng ge rgyal mtshan*) との共訳でテンギュルに収録される。彼が翻訳した作品としては、サツジャナ著 *Putralekha* (D.4187, P.5687) と世親著 *Dharmadharmatāvibhāṅgavṛtti* (D.4028, P.5529)、ラトナヴァジュラ著 *Śricakrasaṃvaramaṇḍaladevagaṇastotra* (D.1531, P.2240)、*Śricakrasaṃvarastotra* (D.1532, P.2241)、*Āryajambalastotra* (P.4999) などがある。
- (4) 袴谷2001: 196 n.61参照。たとえばチャンドラキールティ著 *Bodhisattvayogācāracatuḥśatakaṭīkā* のチベット訳奥書が示す系譜は「婆羅門ラトナヴァジュラ、その孫の大婆羅門サツジャナ、その一人息子スガタ、学者スクスマジャナ」というものである(D.3865, 239a5-7, P.5266, 273b3-5)。いっぽうターラナータは、サツジャナとマハージャナの父子関係を逆転させる(*rGya gar chos 'byung*, p. 183.10およびNaudou 1968: 174; Seyfort Ruegg 1969: 35 n. 4; Seyfort Ruegg 2000: 18, n. 31参照)。
- (5) *Putralekha*, IV.18:
nyes kun rtsa ba bag med gnas // 'di dang gzhan du rnam par rmongs //
de bas skye bo chen po khyod // chang la dga' ba rtag tu spongs //
- (6) *rJe gsan yig*, 19b4-5, 20a2-3, 20a5; *Chos nyid rnam bshad*, 86.2-4.
- (7) Tatz 1987参照。
- (8) ションヌベルによると、サツジャナはカシュミールのジュニャーナシュリーなどへ『宝性論』の写本を渡したという(*Deb ther sngon po*, p. 422.13およびRoerich 1949: 347参照)。
- (9) 彼は1081年にダタン (*Gra thang*) 寺を建立し1090年に亡くなった(Seyfort Ruegg 1969: 36 n. 2およびVitali 1990: 39参照)。
- (10) 文字通りは「心にすえる」(*thugs la gdags pa*)。 *Deb ther sngon po* (p. 423.2) における平行箇所では、*thugs la gdags pa* の代わりに「お与えになる」(*gnang ba*) とある。なおツェンはチベットを発つ直前の1076年に西チベットで催された法輪会において、自らの

パンディタ (pradznya na) から弥勒の法についての説法を聴いており、これが上記の出来事
 の背景となっていると考えられる。*Rwa lo rnam thar*, pp. 205-206: de'i tshe mnga'
 bdag rtse ldes dbus gtsang gi sde snod 'dzin pa drag rim rnams spyang drangs te
 chos 'khor btsugs pa dang dus mtshungs pas /gzhis byes kyi skye bo'i bsu skyel
 rgyun mi 'chad pas bsus te chos 'khor la phebs /rngog lo tsā ba blo ldan shes rab
 /gnyan lo tsā ba dar ma grags /btsan kha bo che /khyung po chos brtson /mar
 thung dad pa shes rab /mang 'or byang chub shes rab /dwags po dbang rgyal
 rnams dang stabs gcig tu byung /der chos kyi 'khor lo legs par bskor /zang mkhar
 lo tsā bas tshad ma rgyan yang dus der bsgyur /btsan kha bo che'i pañdi ta pradz
 nya na la byams chos gsan /

このときツェンはずでに56歳の高齢であったという (*Deb ther sngon po*, p. 422.17-18
 およびRoerich 1949: 347参照)。

- (11) *rGyud bla 'grel bshad*, p. 4.8-18: rgyud bla ma dang /chos dang chos nyid rnam
 par 'byed pa gnyis po 'grel pa dang bcas pa ni mchod rten zhig gi bug pa las 'od
 byung ba mnga' bdag mai trī pas gzigs te 'od byung sa nas [= na] ci zhig yod
 snyam du btsal bas bstan bcas gnyis po'i dpe byung ste /dgyes nas rje btsun la
 gsol ba btap pa las sprin gyi mthongs su mngon sum du byon te lung legs par stsal
 to zhes grag go /de nas pañdi ta dga' ba'i grags pa zhes bya bas mnga' bdag las
 mnyan te dpe khyer nas sprang po'i chas kyis kha cher byon pa na pañdi ta chen
 po sa dzdza nas mkhas pa yin par ngo shes te rang gi gnas su spyang drangs nas
 bstan bcas gnyis po gsan zhing dpe yang bris so //de la lo tsā ba chen po blo ldan
 shes rab kyis gsan nas kha che'i grong khyer dpe med du bsgyur zhing bod kyi yul
 du rgya cher bshad pa mdzad do //grwa pa mngon shes kyi mkhan bu btsan kha
 bo che zhes grags pas kyang lo tsā ba chen po dang lhan cig tu kha cher byon te /
 sa dzdza na la kho bo bcom ldan 'das byams pa'i chos rnams la 'chi chos bgyid
 pas gdams pa dang bcas te thugs la gdags par zhus pa las lo tsā ba gzu dga' ba
 rdo rjes lo tsā byas nas chos lnga po thams cad gsungs shing /rgyud bla ma la
 gdams pa yang legs par gnang nas btsan gyis bod du 'ongs te dbus gtsang du du
 ma zhig la bshad pa mdzad do //lo tsā ba gzu dga' ba rdo rjes rgyud bla ma la
 sadzdza na'i gsung dang mthun par ṭi kā mdzad cing /chos nyid rnam 'byed rtsa
 'grel kyang bsgyur ro //

Deb ther sngon po (pp. 422.1-423.5, Roerich 1949: 347-348) にもこれと類似する記述
 がみられる。Naudou 1968: 175-177、Seyfort Ruegg 1969: 36-39、Kawamura 1984、
 Mathes 1996: 164、袴谷2001: 178-179参照。

- (12) その他のサツジャナの弟子としてはダルマキールティ、パトマセンゲなどがある (*mKhas
 pa'i dga' ston*, p. 866; *Deb ther sngon po*, p. 423; Roerich 1949: 350)。
 (13) サンゲギャムツォによると、ロデンシェーラブはカシュミールを一度去り、マガダ地方に
 至り、再びカシュミールに戻ってきた際にサツジャナのもとで学んだという (*g.Ya' sel*,
 411a3)。Kramer 1997: 31参照。

- (14) 以下を参照。*rGyud bla dka' 'grel*, 3a1-3; *Ngag dbang thob yig*, 27b2-28a3; *Klong rdor thob yig*, 132.16-133.12; *Rol pa'i chu gter*, 172a3-6; *rGyud bla 'grel pa*, 8a3-10a3.
- (15) *Ngor chen thob yig*, 204b5; *rGyud bla rnam bshad*, 519.1-3.
- (16) *Chos nyid rnam bshad*, 86.2-4.
- (17) いっぽうサツジャナを含まない『宝性論』の相承系譜もある。プトゥンとケートゥップ各々の「聴聞録」の示す系譜がそれである (*Bu ston gsan yig*, 17b2-3, 26b4-7; *mKhas grub gsan yig*, 5b6-7)。これはプトゥンが、サツジャナを含まない『現観莊嚴論』の系譜と、弥勒の五法の系譜を結びつけたことによる。ケートゥップはプトゥンの系譜をそのまま受け継いでいる。
- (18) その他、サツジャナ流の『大乘莊嚴經論』への注釈の伝統がチベットに伝えられている点から、彼は実際に『大乘莊嚴經論』の注釈を著したとおもわれるが未発見である。下記注(33)参照。
- (19) Dietz 1984: 298およびHahn 1998: 206参照。同文献の共訳者のマルパ・チューキワンチュク (1042-1136) については、川越1985を参照。
- (20) Hanisch 2002参照。
- (21) この説話の典拠については、Dietz 1984: 275 n.6を参照。
- (22) テクストはDietz 1984: 272-274の校訂本にもとづいた。

mtsho chen sa gzhir gyur 'di dgra bcom bye ba'i yul //
 legs spyod mis gang dpe med dpal sgo rig gnas 'dir //
 mkhas pa rin chen rdo rje'i rgyud 'dzin bram ze'i rigs //
 gzugs stob shes rab phun tshogs ma hā dzā nar 'gyur //0.1

mchog tu brtse ba'i pha ma mdza' bshes gnyen 'dun tshogs //
 mchil ma'i thal ba bzhin du ltos med yal dor nas //
 mtha' khob kla klo mun pa'i nang na gcig 'khyam pa //
 blo ldan bu de shes rab sgron mes snang gyur cig //0.2

shin tu brtse ba'i ded dpon bdag gis ni //
 legs bshad rgya mtsho'i gling nas blangs pa yi //
 spring yig rin chen 'di ni bu la bskur //
 rab gus dga' zhing dad pas mnyan par gyis //0.3

dge ba'i yul dbus khang bzangs longs spyod dang //
 g.yo med sems kyis rgyun du brtse ba yi //
 pha ma mdza' bshes rtsa lag spangs nas ni //
 bu khyod mtha' 'khob rgyu ba shin tu smad //I.1

dam chos phyir ni pha ma yal dor nas //
 nor bzangs bzhin du yul gzhan rgyu 'os na //

'dod pa'i don du pha ma yal dor nas //
smad pa'i yul du rgyu ba ga la rigs //I.2

(23) *rJe gsan yig*, 20a3: bram ze sad dza na /de'i sras mahā dza nas mnga' ris su byon nas /gnyal pa phyag lo tstsha dga' po la /...

(24) 『息子への手紙』に引用されるテキストについてはDietz 1984: 64-65を参照。

(25) *Bu ston chos 'byung*, 72b1-2: sad dza na na re /rang sangs rgyas kyi rigs can la rang rgyal gyi chos kyi 'khor lo bskor gsung ba la /chag na re / 'khor lo gsum du bshad pa dang 'gal zhing /de lta bu'i sde snod logs pa mi snang bas bsal zer ro //

Obermillerの訳は以下のとおり。 “And, according to Sajjana: — It is the Wheel of the Doctrine of the Pratyekabuddhas demonstrated to the members of that spiritual family. [As concerns this last statement], Chag says that it is contradictory to that which is said about the 3 Wheels of the Doctrine (i.e. that the first is intended for the Hinayānists, the second for the Mahāyānists, and the third — for the adherents of all the Vehicles) . This is quite clear, since no such separate Code [of the Pratyekabuddhas] exists” (Obermiller 1932: 55) .

(26) *Khrid brgya'i skor*, 104.3-5: gzhan stong lta khrid yang btsan kha'o che'i gsungs /kha che paṇḍi ta sad dza na'i gsung gi rgyal bas 'khor lo dang po bden bzhi'i /bar pa mtshan nyid med pa /mthar legs par rnam par phye ba'i chos kyi 'khor lo bzlas pa lan gsum bskor bas [= ba] las snga ma gnyis dngos rtags ma phye ba /phyi ma don dam par nges pa'i tshe /dbus dang mtha' phye /chos dang chos nyid phye nas gsungs shing / (Stearns 1999: 42-3参照。)文中の「中道と極端を区別し、現象と法性を区別して教示した」とは『中辺分別論』および『法法性分別論』の所説を指す。

(27) *Khrid brgya'i skor*, 104.7: pad ma lcags kyu'i ming bzhag pa'i btsan kha bo che rang gi zin tho rnying pa zhis snang ba 'dis /

(28) パドマセンゲは、サツジャナによる『大乘莊嚴經論』の講義録を書き留めた (*Deb ther sngon po*, p. 423.6-7: des (= Padma seng ge) kyang sadzda na la gtugs pa'i skabs kyi zin bris byas pa'i mdo sde rgyan gyi ṭi ka chen po zhis kyang snang ngo. Roerich 1949: 348参照)。このテキストは未発見だが、ジャムヤンガロの引用はこれに基づいたと予想される。

(29) 「あたかも黄金が加工され、蓮華が開花し、飢えた人が美食を享受し、美文が理解され、宝箱が開かれたように、かの法がここに開示されれば、最上の喜びをもたらすだろう。」 (MSA I.2: ghaṭitam iva suvarṇam vārijaṃ vā vibuddhaṃ sukṛtam iva subhojyaṃ bhujyamānaṃ kṣudhārtaiḥ / vidita iva sulekho ratnapeteṇa muktā vivṛta iha sa dharmāḥ pritim agryāṃ dadhāti //) 小谷1984: 68参照。

なお a 句 ghaṭita 「加工された」について、ヴァイローチャナラクシタは abhisamkrta 「仕上げられた」とシノニムを挙げておきながら、āvaraṇādighaṭita 「汚れなどが拭い去られた (=ghaṭita)」と説明している (「仕上げられた黄金は汚れなどが拭い去られて輝くように」 yathābhisamkrtaṃ suvarṇam āvaraṇādighaṭitaṃ virājate. 下掲注(40)参照)。ただしアスヴァパーヴァ、スティラマティ、パラヒタパドラは ghaṭita 「加工された」の意

味で理解する (D.4029, 41a3-4; D.4034, 9a7; D.4030, 179b6-7参照)。

- (30) 「5つの比喩によって『かの法』は5つの意味に関連していることが、この偈にて示された。すなわち所成、分析対象、思惟対象、不可思議なもの、完全にして個々に証得されるべき菩提分を本性とする悟りの対象とである。それがこの『莊嚴經論』によって開示されれば、順次『黄金が研磨される』云々というごとくに『最上の喜びをもたらす』。(MSA, p. 2.7-10: anena ślokena pañcabhir drṣṭāntaiḥ sa hi dharmāḥ pañcavidham artham adhikṛtya deśitāḥ sādhyam vyutpādyam cintyam acintyam pariniṣpannam cādhigamārtham pratyātmavedaniyam bodhipakṣasvabhāvaḥ / so 'nena sūtrālamkāreṇa vivṛtaḥ pritim agryam dadhāti / yathākramam ghaṭitasuvarṇādivat /)
- (31) 「行」章はMSA XX-XXI.1-42を指す。
- (32) 「最終章」はMSA XX-XXI.43-61を指す。
- (33) *mDo rgyan mchod sprin*, 10b5-7: yang saszana'i [= sadzdana'i] lugs su byas pa kha cig / theg chen bkar sgrub ni / sgrub par byar bya ba [= sgrub par bya ba] dang skyabs 'gro nas byang chub kyi bar rnams bye brag tu shes par bya / mos pa nas thabs ldan gyi bar rnams bsam par bya la / phyin drug nas spyod pa'i bar rnams bsam kyis mi kyab [= bsam gyis mi khyab] pa dang / mthar thug gi le'u'i don rnams yong [= yongs] su grub par rtogs pa'i don yin pas rim pa ltar dpe lnga dang sbyor zhes zer / (テキストは小谷1984: 75による。)
- (34) *mDo rgyan mchod sprin*, 8a3-11a5および小谷1984: 66-76参照。小谷氏はそのテキストと和訳を提示している。
- (35) アスヴァバーヴァ著 *Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā* (D.4029, 40b6-44b7, P.5530, 47a7-51b1), スティラマティ著 *Sūtrālamkāravṛttibhāṣya* (D.4034, 9a1-14b7, P.5531, 9a8-15b2)。ここに示される五事と三性説の対応関係は *Madhyāntavibhāga*, III.13の所説を軌範にしたものであろう。またスティラマティ著 *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (MAVT, pp. 131-133) に類似する議論がみられる。
- (36) ロデンシェーラブの『莊嚴經論注』は未発見であるが、『カダム宝説集』(*bKa' gdams bang mdzod*, pp. 149-150) には、その内容の要約が提示される。それによると写本原本は58葉からなるといわれる (同p.150: shog gu nga brgyad chos sdings kyi phyag dpe nas btus so)。Jackson 1987: 148 n. 8およびSeyfort Ruegg 2000: 29 n. 54参照。
- (37) さらにロデンシェーラブは『莊嚴經論』第1-9章が大乗の意味の本質、第10-19章が行、最終章が果にそれぞれ相当すると解釈する。
- (38) ジュニャーナシュリー著 *Sūtrālamkārapīṇḍārtha* (D.4031, P.5533) を参照。内容概観と和訳については野澤1938および資延1974を参照。同作品には6葉からなる梵文貝葉写本が存在する (王森『民族図書館蔵梵文貝葉目録』No. 16および武内1995: 9参照)。
- (39) ジャムヤンゴロが提示するシャーンティバドラ (Shi ba bzang po) の解釈は、パラヒタバドラの『莊嚴經論』の注にみられる解釈と一致する。このことからシャーンティバドラとはパラヒタバドラを指すと思われる (パラヒタバドラ著 *Sūtrālamkāradīślokadvayavyākhyāna*, D.4030, 179b1-183b1, P.5532, 7b7-12b2)。パラヒタバドラの同作品の内容については野澤1936を参照。

- (40) ヴァイローチャナラクシタ (11/12世紀) は『莊嚴經論』注において、アスヴァバーヴァおよびスティラマティの説を要約しており、場合によってはパラフレーズしている。下掲のテキストは目下準備中の校訂本による (Göttingen Xc14/34, 17r7-v6に相当)。アスヴァバーヴァ注およびスティラマティ注の対応箇所は下掲テキストの末尾に注記した。

sādhyādīpañcaavidhasya vivaraṇaṃ, mahāyānapañcavastukena nāmanimittavikalpatathatānirvikalpajñānātmakena /^a

tatra nāma, saṃjñā, yathaiva nāma tathaivāmi dharmā ity abhiniviṣṭo lokāḥ / yac ca nāmnābhidhiyate tan nāsti svabhāvata ityetaḍ duḥpratipādyatvāt sādhyam / tatsādharmyeṇa ghaṭitasuvarṇaṃ / yathābhisamskṛtaṃ suvarṇaṃ āvaraṇādighaṭitaṃ virājate / evaṃ mahāyānam api parapakṣāpavādena sādhitam ghaṭitasuvarṇam iva pritim agryāṃ dadhātīti sādhyam uktaṃ /^b

nimittam āśrayaḥ paratantraḥ pratītyasamutpannaṃ vastu, na lokasyātiva vipratipattiḥ / kevalam vyutpādyam eva tat / tatsādharmyeṇa vārijaṃ / yathā prabuddhaṃ padmaṃ pritiṃ dadhāti evaṃ pratītyasamutpannaṃ vastupratipādanam iti vyutpādyam uktaṃ /^c

vikalpas tad eva pratītyasamutpannavastumātraṃ cittacaittarūpayoniśovikalpaś cintayitavyaṃ / taiś cintyamānaṃ kleśaprahāṇāya vyavadānānukūlyāya ca bhavati, tatsādharmyeṇa sukṛtabhojanaṃ / tathā hi sukṛtabhojanaṃ kṣudhārtairbhujyamānaṃ pritiṃ dadhāti / evaṃ mahāyānadharmo 'py amṛtaprakhyāḥ sadharmaśravaṇavṛttasthitair yoniśovikalpyair bhujyamānaḥ pritim agryāṃ dadhātīti cintya uktaḥ /^d

tathatā, acintyā, cittāgocaravtvāt svasaṃvedyatvāc ca / etatsādharmyeṇa lekhaḥ / yathā sulekho vidvaddhastagataḥ pritiṃ dadhāti / tathā tathatāpi buddhādinām prathamabhūmyadhigamam ārabhya pratyātmavedyā anāsravā pritiṃ utpādayati, bālacintātikrāntatvāt acintyety ucyate /^e

nirvikalpajñānaṃ bodhipakṣasvabhāvaṃ pariniṣpannaṃ svaviditaṃ pritiṃ dadhāti, etatsādharmyeṇa ratnapetā / tathatā na bālānaṃ gocarā, bodhipakṣasvabhāvaṃ pariniṣpannaṃ tu gocara iti viśeṣaḥ /^f

以下、Sはスティラマティ注 (D.4034)、Aはアスヴァバーヴァ注 (D.4029) を指す。

^aA 40b7, S 9a3. ^bA 40b7-41a5, S 9a3-b2. ^cA 41a5-b1, S 9b2-6. ^dA 41b1-5, S 9b6-10a5. ^eA 41b5-42a2, S 10a5-b3. ^fA 42a2-b3, S 10b3-11b4.)

- (41) *mDo rgyan mchod sprin*, 10b2-3: ming sogs chos lnga dang dpe lnga sbyor ba ni mi rigs te / ming sogs lnga bstan bcos 'di'i brjod bya min pa'i phyir zhes lo chen dang mthun par dgag pa mdzad do //ジュニャーナシュリー著 *Sūtrālamkārapīṇḍārtha* (D.4031, 184a2-3, P.5533, 13a4-5) 参照。

- (42) Sāṅkryāyana 1935: 31およびBandurski 1994: 33参照。シャーラダー文字で綴られた『宝性論』関係の写本としては、サツジャナ作品以外は知られていない。なおJohnstonは『宝性論』A写本の書体を「初期シャーラダー文字」と判断しているが (Johnston 1950: vi)、これには問題がある。また塚本 1990: 342において、才川氏の挙げる4種の『宝性論』写本の

- うち、(1) がこの『究竟論提要』に相当する。
- (43) Sāṅkrtyāyana 1937: 14, 34, 55参照。
- (44) おなじ写真版の焼き増しが現在ゲッティンゲンに保管されている (Bandurski 1994: 32-33, Göttingen Xc14/lc)。
- (45) 高崎1974: 55参照。
- (46) Johnston 1950: vi “Of the three MSS. mentioned, one proved on examination not to be of the *Ratnagoṭravibhāga*. As at present constituted, it consists of three folios in a script, which is substantially older than that of the other two MSS., VIII century perhaps or even earlier, and is hard to decipher in the photographs; it contains a brief summary of the *Ratnagoṭravibhāga*, as appears from the colophon, *Mahāyānottaratantrapadeśa kṛtīś ŚrīSatyajñāpādānām*. The author, *Satyajñāna*, is apparently not mentioned else where, and I have not noted any passages which throw light on the text of the main work.”
- (47) 高崎氏は、Tucci がこの写本を「恐らくゴル寺で撮影した」(高崎1974: 52) と述べるが、Sāṅkrtyāyana は同じ写本をシャル寺で撮影している。
- (48) Tucci 1958: xi. “The Ratnagoṭra-upadeśa of Sajjanapāda I sent for publication to my friend V.V.Gokhale who has devoted a great part of his time to the study of the Ratnagoṭra.”
- (49) のちにGokhaleの手許で写真原板は紛失したが、その写真からのコピーが高崎氏の手元に残った(高崎1974: 53参照)。なお Tucci の梵文写本および写本写真コレクションの目録中に本作品は収録されていない (Sferra 2000参照)。
- (50) Steinkellner 2004参照。
- (51) 写本の大きさについては Sāṅkrtyāyana 1935: 31の記述に従った。
- (52) Johnstonはその根拠を以下のように述べる。“It is closely related to the handwriting of MS. A of the *Bhaiṣajyaguruvaiḍūryaprabhārājasūtra* as illustrated in *Gilgit Manuscripts*, I” (1950: iv n.2) . Johnstonは当写本の文字をシャーラダー文字と認識していなかった可能性も考えられる。彼の誤解は、おそらくシャーラダー文字とその祖形であるギルギット/バーミヤンII型文字とを混同したことに基づくとみられる。この誤解はそのままBandurskiによって踏襲されている (Bandurski 1994: 21)。
- (53) Slajeはシャーラダー文字を以下のように定義する。「シャーラダーとは局地的な北インドの文字を指す。本来、カシュミールとアフガニスタンに由来する8-10世紀の字形であり、いわゆるギルギット/バーミヤンII型文字(6-10世紀の起源をもつ写本から命名された)からきわめて特殊なたちでさらに発展したものである。それゆえ、およそ10世紀以降の発達した、当時のその祖形文字に決定的に取って代わったところの、シャーラダー文字について論じるのが一般的である。北西インド、殊にカシュミール、ジャンム、パンジャブ、ラダック、チャンパ、カンガラ、ハルヤナ地域にシャーラダーが普及したことは碑文にもとづいて判明している。12世紀以降、シャーラダーが写本の筆写に使用された点は証明されている。さらに、とりわけカシュミールだけに限られるが、ヒンドゥー教の高位階級に属する高齢者たちによって今日まで使用されつづけている。この文字が「シャーラダー」と

よばれるゆえんは、その本来の発祥地たる、サラスヴァティー女神（すなわちシャーラダー女神）の本拠地カシュミールを示唆してのことかもしれない。あるいは「ことばの音節」（śaradākṣara）を文字で表現したのものとしての「ことばの女神」との間接的な関連性にもとづいたのかもしれない。ただし11世紀以前には、この名称はまだ一般的でなかっただろう。（Slaje 1993: 15-16）

- (54) Deambi 1982: 67。ただしここで12世紀というのはDeambiによる、書体学的な観点にもとづく推定年代である。いっぽう碑文におけるシャーラダー文字の最古の使用例は774/775年といわれる（Deambi 1982: 24）。
- (55) jihvāmūliyaは第5偈d句、7偈a句、15偈ab句、17偈ab句、21偈d句、21偈注記、23偈および24偈注記、25偈b句、28偈注記、34偈d句にみられる。ただし例外もみられ、20偈注記（°phalaiḥ kra°）、28偈注記（°ārthāḥ kleśa°）、奥書（°śaḥ kr°）においては無声喉音直前でvisargaが使用されている。いっぽうupadhmaniyaは第6偈注記、12偈cd句、17偈注記、20偈cd句、22偈b句、22偈注記、24偈cd句、26偈bc句、27偈b句にみられる。ただし31偈注記（°śuddhiḥ pra°）においては無声唇音直前でもvisargaが使用される。
- (56) 高崎氏は「rthaなどは3種の書体が混用されている」というが、実際には2種のみが使用されているようにみえる。
- (57) 両者の字形は11-13世紀の碑文と11-14世紀の写本に確認される。Deambi 1982: Table 3c, 5c参照。
- (58) Sander 1968: 145ならびに「文字表 V」を参照。ギルギット/バーミヤンII型文字の年代についてはSander 1968: 160を参照。
- (59) Deambi 1982: 74。これは15世紀のJonarājaの報告にもとづいている。
- (60) Sander 1968: 143。当写本の2種のrthaの字形は、Deambi 1982: 5D所掲の12世紀の写本の第2の字形、および14世紀の写本の第1の字形とそれぞれ対応する。
- (61) ri/ṛの交替は第7偈c句āśṛtya、14偈d句āśṛtaḥ、33偈b句āśṛtāḥに確認される。
- (62) n/ṇの交替は第1偈の注記triyāṇikānに確認される。この場合、ṇの使用はrephaの影響と考えられる。
- (63) たとえば母音直前にanusvāraが使用されることがある（第2偈の注記ekādaśyām eva）。
- (64) 第9偈の本文には、ab句とcd句の間に注釈文が挿入されている。高崎氏はこれを本文に含めるが、文脈と韻律の2点から注釈と判断しうる。
- (65) なお第2偈に対する注記には『宝性論』I.21の初頭句が引用されるが、これには異読が含まれる。Johnstonは jagaccharaṇam ekatra と読むが、当写本は jagaccharaṇam ekam tu と読み、後者の方がより好ましい。
- (66) たとえば第15偈の注記ではサツジャナが使用する用語、「3種身」（三宝）と「3種法身」（菩提・仏徳・仏業）について説明がなされる（trikāyī buddhādivad acalādau // dharmakāyatrāyī bodhigunaḥkarmavad buddhabhūmau）。

<キーワード> 『宝性論』、サツジャナ